

## 植物学者マキシモヴィッチ (1827-91) と日本

倉田 有佳

朝の連続テレビ番組の影響もあり、マキシモヴィッチへの関心が高まっている。カール・マキシモヴィッチ (1827-91年) は、トゥーラ生まれのバルト・ドイツ人で、父ヨハンは医師だった。現エストニアのタルトゥ大学の前身のドルパト大学で医学と植物学を学んだ後、サンクトペテルブルク帝室植物園に勤務し、そこでの任務として探検隊に加わりロシア各地方の植物を調査することになる。

1853年秋、軍艦「ディアナ号」で世界周遊に出る。同艦は老朽艦「パルラーダ号」の代替船で、出港地クロンシュタットからは、後に在函館ロシア領事館付属聖堂の初代司祭となるワシーリ・マホフを、到着先のニコラエフスクからはプチャーチン提督一行を乗せ日本へと向かった。採集調査を終えたマキシモヴィッチは陸路で帰還し、1859年に出版した『アムール地方植物誌予報』は栄えあるデミドフ賞を受賞した。

同59年、2回目の極東調査へ出かける。シベリアを横断し、ウラジオストクからは「グリーデン号」に乗り、1860年9月18日函館に到着した。ロシア領事館のアルプレヒト医師とは大学の同窓で、函館滞在中は共に植物採集に出かけている。

興味深いのは、ドイツ語で書かれたマキシモヴィッチの「旅日記」で、完成間もない領事館の外観のすばらしさだけでなく、「小さな壁掛け、絨毯、家具などがきちんとしつらえていた。ただ

残念なことには、汚れ、なげやりになっていたことである」。領事館のフィンランド人とロシア人の女中は、「家族によく馴れていた」が、孤独をまぎらすかのように「人目を忍んで暇をつくって酒を飲み、昂じて度を越す」ようになっていた」（井上幸三『マキシモヴィッチと須川長之助 (増訂版)』1996年) など、領事館内の様子や人間模様も描かれている。

開港地での遊歩区域は十里 (函館では五里) と規制されていたため、岩手から函館に出稼ぎにやって来た農家の出の須川長之助に採取方法・標本の調製・花実の写生方法を教え込み、助手をさせた。1864年2月、マキシモヴィッチは横浜から帰国するが、その後も2年ほど長之助に採集を依頼してきた。

1887年、20年振りに採集依頼が伝えられた長之助は、東京の公使館付司祭アナトーリ (チハイ) やニコライ主教の仲介で、ロシアにいるマキシモヴィッチに植物を届けた。1890年5月9日付のニコライがマキシモヴィッチに宛てた手紙からは、アナトーリ司祭が過度なまでに協力していたことや、病気で帰国したアナトーリ司祭ほど自分は協力できない、といった意思表示が読み取れる。その翌年、マキシモ



マキシモヴィッチ肖像写真 (北大学文書館所蔵) (『北海道大学総合博物館企画展示「花の白露交流史—幕末の箱館山を見た男」図録 マキシモヴィッチ・長之助・宮部』2010年)

ヴィッチはインフルエンザで急死した。植物以外にも向けられたマキシモヴィッチの鋭い観察眼、彼を陰から支えた人々の姿が印象的である。(ロシア極東連邦総合大学函館校教授)